



小児期の急性虫垂炎のおはなし

小児外科副部長 吉田 英樹



●はじめに

虫垂とは大腸の始まりである盲腸の先に、ヒモのようにぶら下がる長さ5cmほどの部位の名称です。この部位が炎症をおこして腫れるのが急性虫垂炎(俗に‘盲腸’とか‘アッペ’と呼ばれる)です。小児期では10～15才が発症のピークになります。小児期に緊急手術を要する疾患の中で最も多い疾患であり、当院小児外科でも過去5年間で98例の患者さまに緊急手術を施行し、うち82例(84%)が急性虫垂炎の患者さまでした。

●急性虫垂炎の症状

腹痛・発熱

腹痛の部位は虫垂が存在する右下腹部で強くなりますが、最初はみぞおちあたりで痛くなり、徐々に右下腹部に移って来るともあります。痛みが強くなると、嘔吐したり、おなかをかばうような歩き方になったりします。発熱も特徴的な症状ですが、平熱のこともよくあります。症状をうまく表現できない小児であっても、右下腹部を押さえてみると、顔をしかめたり、手を払いのけたりすることで判断がつく場合があります。

●診断の方法

右下腹部に痛みがあって、腹部CTや腹部超音波検査で虫垂の腫れが認められれば虫垂炎と診断します。

よく似た症状の疾患には感染性腸炎、回腸末端炎や憩室炎などがあり、小児では症状をうまく表現できず、腹部所見がはっきりしないこともあるため、画像診断はたいへん役立ちます。血液検査も炎症の程度を評価したいときに行います。

●急性虫垂炎の治療

虫垂炎の重症度によって治療方針を決めます。緊急手術が必要な場合が多いですが、症状によっては通院もしくは入院での食事制限や抗菌薬による保存的治療を選択する場合があります。ただ経過中に症状が悪化したり、一旦治って治療を終了してから再び炎症を起こす可能性があるため、いつでも対応できる施設で治療することが望ましいです。手術治療では虫垂切除を行います。当院ではこれまでほとんどの患者さまにキズが小さい腹腔鏡手術で治療をおこなっています。重症度によりませんが、合併症がなければ術後3～4日で退院できることが多いです。

●最後に

小児期の急性虫垂炎は症状の悪化が早いとも言われ、できるだけ早めに医療施設を受診することが大切です。緊急手術になる可能性が高い疾患ではありますが、すべての患者さまで必要というわけではありません。いつもの腹痛と様子が違うな、と思ったときはどうか我慢せず、怖がらずに当院へご相談ください。

当院には常勤の小児外科専門医が在籍しております。